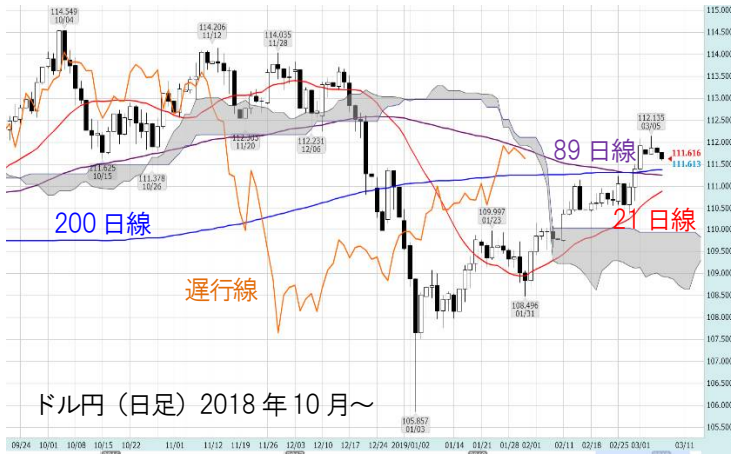


■ テクニカル的に見ればドル/円の上値余地は拡がりやすい！

ちょうど1週間前の2/28、ついにドル/円は上向きの200日線を上抜けた(下図参照)。ほぼ同時に89日線をも上抜けたが、同線は今のところ下向きの状態であり、いずれ上向きに転じて



くるタイミングが待たれる。その頃までには21日線が89日線、200日線を順に上抜ける可能性が高く、さらに89日線が200日線を上抜ける場面が訪れると、上から21日線・89日線・200日線という順に並ぶ体系、すなわち「パーフェクト・オーダー(完璧な順番)」と称される超強気のパターンとなる。ただ、目先は日足の「遅行線」が日足「雲」に頭を押さえられるような格好となっている点に要注意。むろん、数日以内に日足「雲」を日足の「遅行線」が上抜ける可能性も大いにあり、そうなると大分上値は軽くなりやすい。目下のドル/円は112円台にしっかりと乗せられるかが一つの焦点となっており、そうなった場合は、まず昨年10月高値から今年1月安値までの下げに対する76.4%戻し=112.27円処、あるいは1月初旬から形成されている上昇チャネルの上辺あたりが意識されやすくなるものと見られる。

他方、ドル/円の月足ロウソクは、ついに2月の終値で31カ月線や一目均衡表の月足「雲」上

限を上抜けることとなった。言うまでもなく、これらはともに強気のシグナルであり、さらに足下でトライしている62カ月線の上抜けにも成功すると、いよいよ2015年6月から長らく形成してきた三角保ち合い(トライアングル)からの上放れに挑戦する可能性が高まってくる。



仮に、このトライアングルを上放れた場合には、月足の遅行線が「26カ月前の月足ロウソクが位置する水準を上抜ける」という、もう一つの強気シグナルも点灯することとなり、少し長い目で2017年初旬から2018年末あたりまでに幾度か試した114円台半ばから後半の水準が意識されやすくなっておかしくない。

本日(3/7)はECB理事会が予定されており、すでに一部には「新たな長期貸し出しオペ(TLTRO)の実施に向けて当面の成長率やインフレ見通しを引き下げてくる」などといった憶測が飛び交っている。「ECBが再び刺激策の実施に動く」との見立てになるが、それもすでに大方織り込み済みと考えられ、ここからユーロに強い売り圧力がかかるというわけでもないだろう。

その意味でも、ここからドルが一段の上値を追う展開となるためには、次の新たな強気材料が欲しいところではある。米中貿易協議の暫定合意もすでに織り込み済みであるとすれば、やはり米消費拡大や半導体市況持ち直しなどといった話題が待たれる。(03月07日 11:40)